



### 「安全な水」を届けるために

東松島市立矢本西小学校 6年 佐藤 夢華

東日本大震災は、私が生まれる一年前の出来事だ。学校で防災の学習に取り組むに当たり、当時の状況について家族に話を聞くと、津波の被害が少なかった我が家で震災時に一番困ったのが「水道が止まった事」だったそうだ。

当時は、様々なライフラインに制限があったが、ガスが使えたので料理ができたし、乾電池があったのでランタンの灯りをつけることもできた。しかし「水」は毎日給水車に並んでも全然足りなかったという。飲み水、洗い物、トイレ、お風呂など、私たちの安全な暮らしには、清潔な水が切り離せない。「蛇口から水が何週間も出てこないなんて、震災当時は大変だったんだね」と話すと、お母さんは、「毎年、震災とかじゃなくても水不足に悩む地域があるんだよ」と言った。私は、水不足の地域について調べてみたいと感じた。

日本で水不足になることが多い地域は、四国地方や沖縄県だという。水不足はその地域の気候や地形と深い関係があり、山が少なく川が短い四国地方や沖縄では、降水量が多くても、川の水がすぐに海へ流れ出てしまう。水不足に悩む地域では、普段の生活に使う水量へ制限がかかるだけでなく、田んぼや畑、工場など、産業にまで大きな影響が出るそうだ。では、それらの地域では水不足に対してどんな対策が行われているのだろうか。

四国地方でも特に香川県は、瀬戸内海特有の気候もあって水不足（渇水）になりやすく、古くから水の確保に苦勞してきた地域である。大きな河川も少ない香川県では「香川用水」という水路を作り、高知県から徳島県までを流れる吉野川の水を引き入れた。この香川用水により県内では安定した水量を確保することができるようになった。

そんな香川県の住民たちには、古くからの「節水」への意識がとても強く根付いている。高松市で毎年開かれる「市民によるダム周辺のボランティア清掃活動」には、小学校からお年寄りまで募集定員の二倍から四倍の応募があるという。また、小中学生を対象にした環境教育の授業が広く行われ、市民に向けられた浄水場やダムの見学、川での清掃活動等も活発だ。このような市民全体の活動の中で、後世にも水に関する文化や知恵、水を大切に思う意識が受け継がれている。

東松島市でもSDGs等、授業を通して学ぶ機会はあるが、高松市と比べると私たちの「節水」への意識は低い。日本国内だけでなく、国外ではまだまだ安全な水が不足する地域がある中で、私たち若い世代が「水」への関心を高めることは大切な意味をもつと思う。そのためにも、これからは身近な地域の水源や環境について関心をもち、正しい「水」への知識を身に付けながら、「自分にどんなことができるか」についてよく考えていきたい。そして将来私は、水くみに苦勞している国の子供達を助ける活動をしたい。